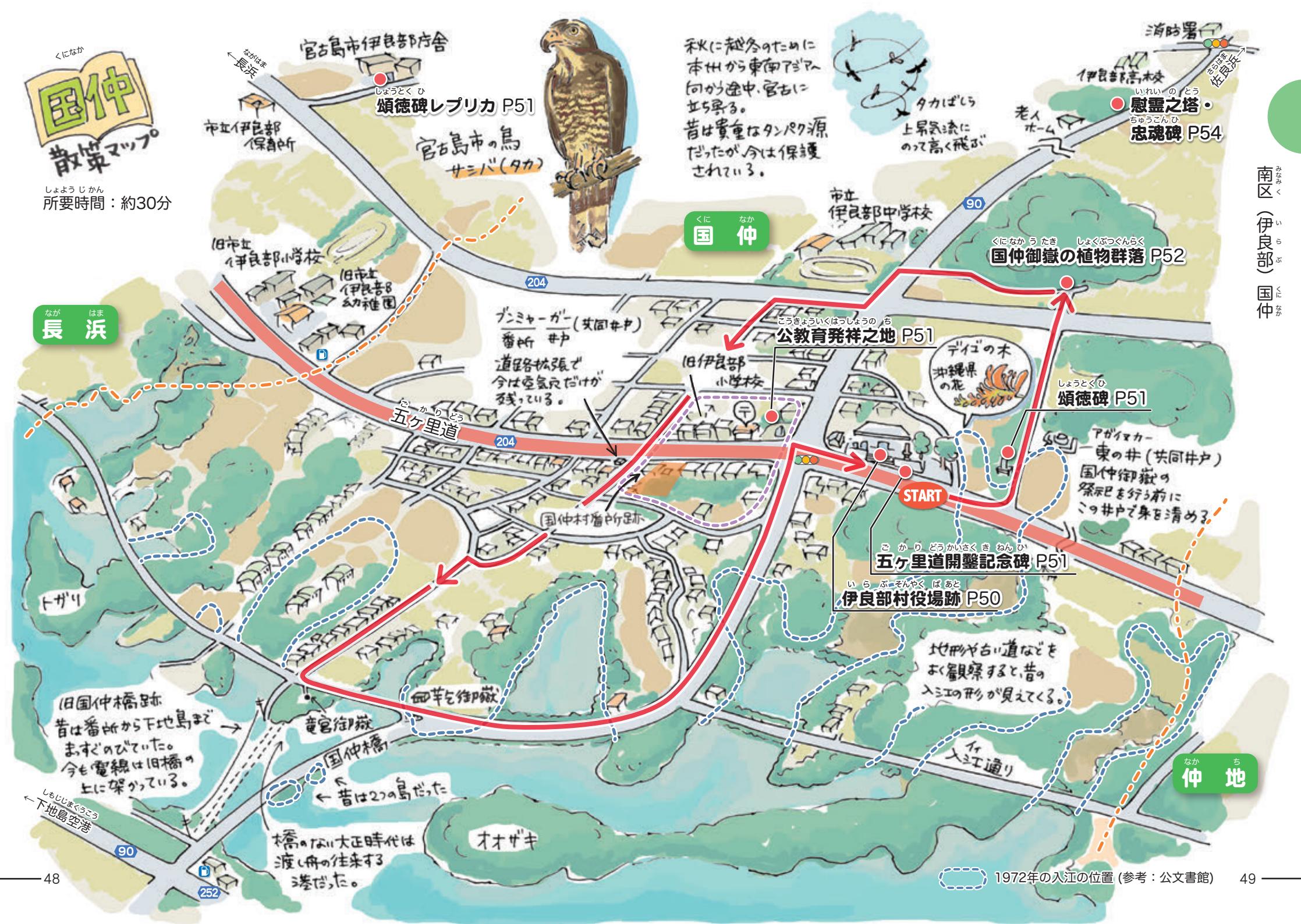


しょようじかん  
所要時間：約30分



い ら ぶ そ ん や く ば あと

# 伊良部村役場跡



1908(明治41)年に、琉球王府の行政区分のひとつであった3間切が、平良、城辺、下地、伊良部の4村に改められました。1981(昭和56)年、伊良部島と下地島を伊良部村とし、長浜地区に移転するまで、長浜に役場が置かれていました。

また、役場跡の碑の横には、1980年に那覇と下地島を結ぶ定期航空路線の就航を記念した石碑が建てられています。



## 伊良部島の発展に尽力した村長 国仲寛徒



初代伊良部村の村長である國仲寛徒は、1873(明治6)年、下地間切佐和田村に生まれました。伊良部島出身で初めて沖縄師範学校を卒業し、平良尋常小学校の先生を経て、伊良部尋常小学校の校長を務めます。当時、平良にしかなかった高等科を開設したり、のちに寛徒自身が校長となる佐良浜の分校を、佐良浜尋常小学校として独立させるなど、子どもたちの教育に尽力しました。

そして1908(明治41)年に伊良部村が設立されると、村長に任命され、今度は伊良部島の発展のために奮闘します。

1915(大正5)年、村の産業の発展には交通網の整備が不可欠であ

ると、南区の5つの集落を結ぶ道を村民の労働奉仕によって建設しました。その道は今もしっかり5つの集落を結んでおり、地域の人たちは親しみを込めて「五ヶ里道」と呼んでいます。

こうして初代村長として人々に慕われ、5期にわたって伊良部島発展の基礎を作り上げた寛徒ですが、任期半ばの1929(昭和4)年、56歳で病に倒れました。

これらの功績を讃えた石碑が、村役場跡周辺や、宮古島市伊良部庁舎に建てられています。



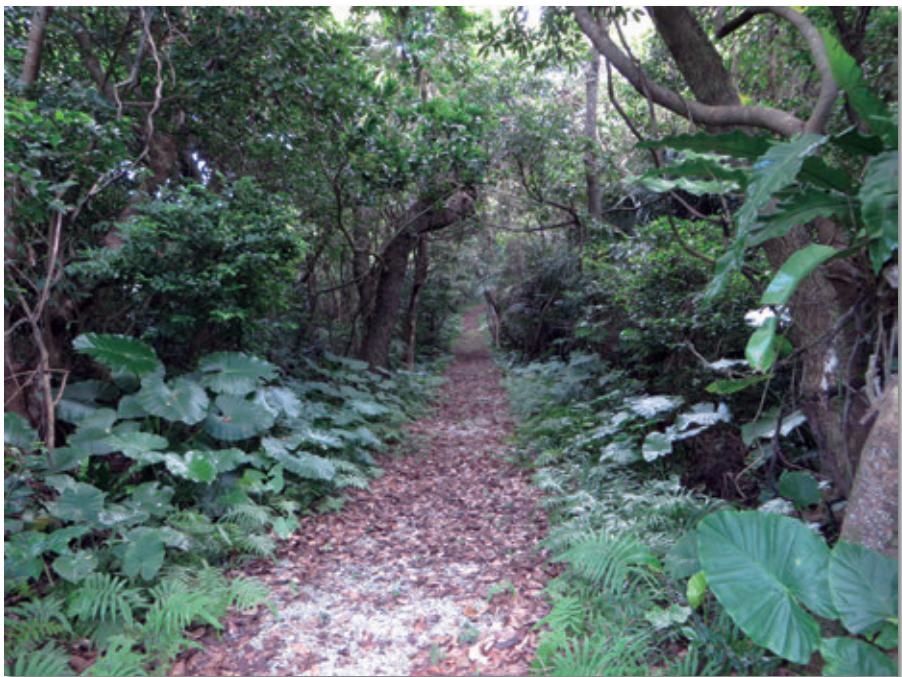
頌徳碑

頌徳碑レプリカ  
(伊良部庁舎内)

五ヶ里道開鑿記念碑



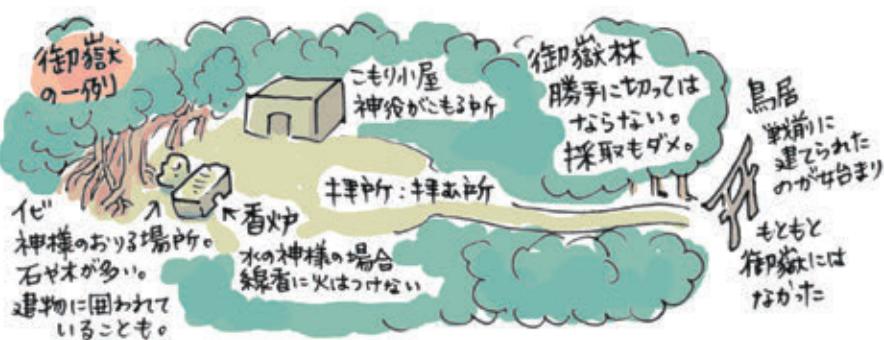
公教育発祥之地

くに なか う たき しょく ぶつ ぐん らく  
國仲御嶽の植物群落

※御嶽は祭祀などを行う大切な場所です。神聖な場所なので入ることはできません。

この御嶽は国仲集落の人々から大切にされている御嶽で、  
「ユークイ」などの多くの祭祀が行われており、祭祀以外で  
中に入ることはできません。

古くから聖域として保護されていた御嶽の周りには、60種  
ほどの植物が生い茂っています。全域  
がうっそうとしており、宮古諸島の中  
でも最も自然林に近い森林が残されて  
います。



## いらぶじませんせき 伊良部島の戦跡

だいにじせかいたいせん しょとう べい  
第二次世界大戦で、宮古諸島は米軍の上陸があるとされていました。そのため、敵の上陸地点を地形から想定して、各所に水際陣地、特攻艇秘匿壕、海軍砲台などを構築し、兵力を配置しました。

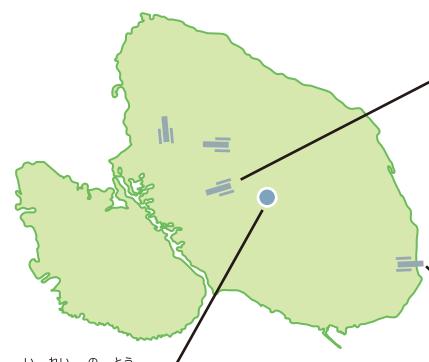
しょうわ  
伊良部島には、1944(昭和19)年に独立混成第59旅団(約3,600名)が伊良部地区防衛のために配備されました。伊良部国民学校に本部が置かれ、佐良浜国民学校は野戦病院として使用されました。そして、牧山や

### 忠魂碑



ちゅうこんひ  
日露戦争後、1914(大正3)年に小越原に建立

くになか うる か ごう  
国仲などでは、大砲を設置するための壕を構築しました。地域住民は、壕を掘る作業に駆り出されたり、各集落で様々な物の供出をしました。また、子どもたちは馬のエサを刈りに行ったり、野草を採るといった協力をしていました。



### 慰靈之塔



いぞくかい  
伊良部地区遺族会によって1963(昭和38)年に建立

## くになか うる か ごう 国仲砂川の壕



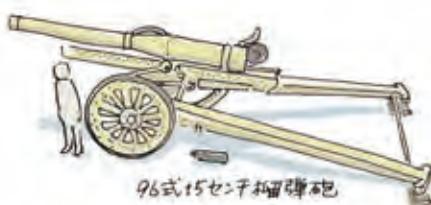
くになか うる か かくにん  
国仲砂川で確認された3つの壕は、いずれも壕口の部分が三角形状になる特徴をもっています。

これは、大砲の脚を開いたときの形態に沿わせたと考えられています。聞き取り調査では、榴弾砲が格納されていたという証言が得られています。

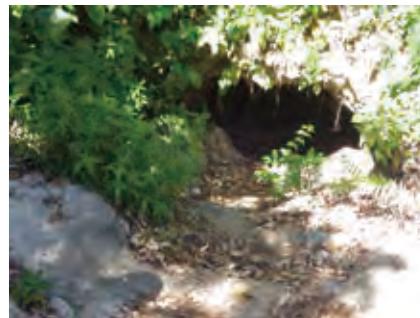
### 上から見た図



### 横から見た図



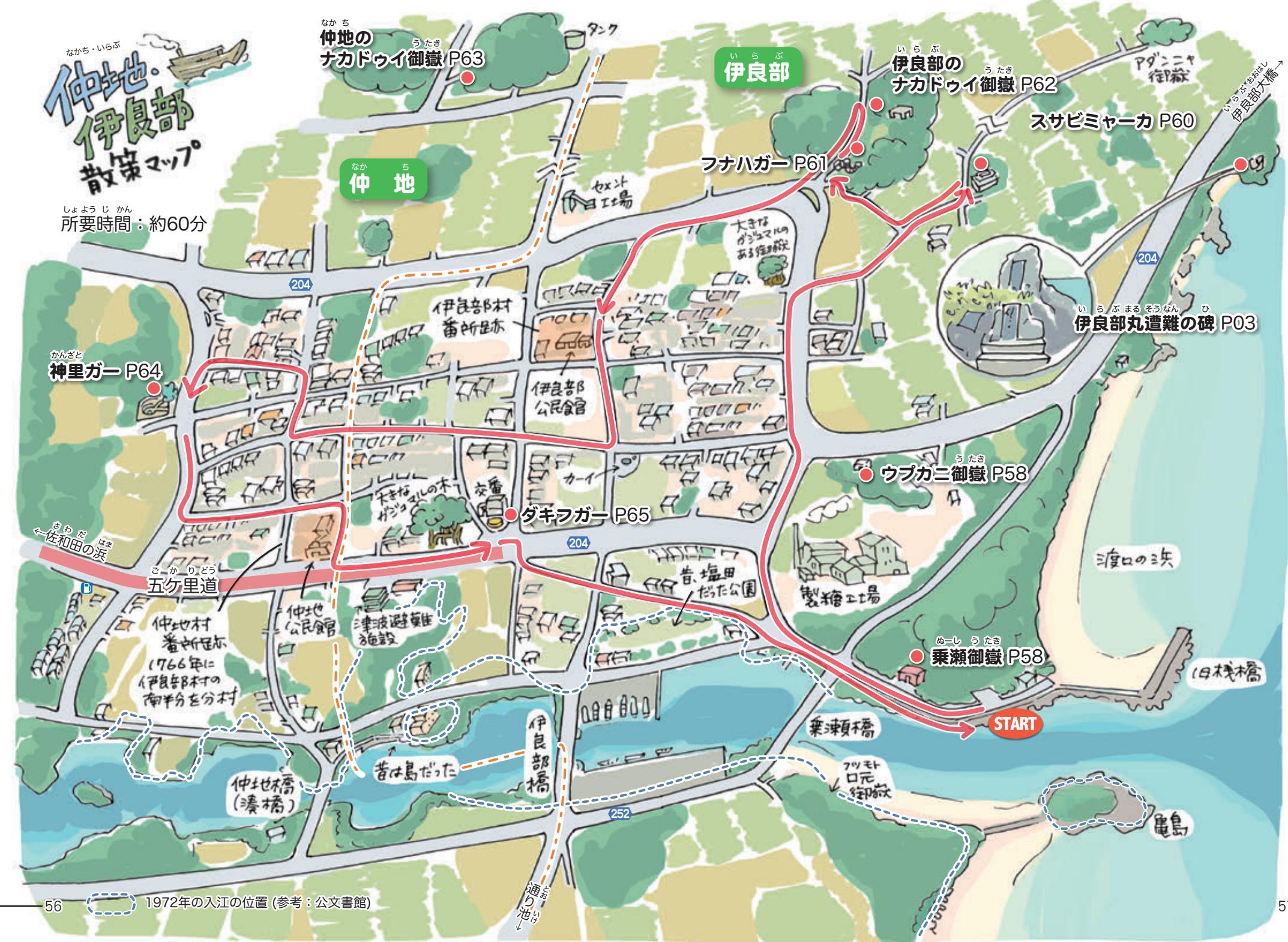
### 牧山陣地壕



まきやま ちょうじょううちか  
牧山の頂上近くに設置された陣地壕で、平良港を守るために作られました。石灰岩を掘り込んだ壕で、「野戦重砲第1大隊第1中隊」と「山砲第28連隊第3中隊」が駐屯していました。

# 仲地・伊良部 散策マップ

所要時間：約60分



## 乗瀬御嶽



渡口の浜に接した森の西端にある乗瀬御嶽は、航海安全の女神であり、島の守護神でもある「玉メガ」を祀っています。かつて行われていた「カンウリ」という祭祀は、集落の中にあるふたつの御嶽で祈願した後、乗瀬御嶽に籠って5日4晩の「願い」を行います。この祭祀では、御嶽と御嶽の間を移動するツカサらの行列に、男性は出逢ってはならないという男子禁制の習わしがありました。

たま  
玉メガものがたり

むかしむかし、フナハガーの近くに暮らす、ウブカニという夫婦の間に、16歳になる玉メガというたいへん美しい娘がいました。

父のウブカニはとても人望の厚い人でした。ある年、干ばつで飢饉になった村に、雨乞いの御願を行いたいと考えました。しかし、やり方があわらなかつたため、御願の方法を習いに、八重山へ旅立ちました。

父の帰りを待つ玉メガは、そろそろ戻ってくる父を喜ばせようと、父が好きな豆腐を作るために、乗瀬の浜へ潮汲みに岡かけました。

ところが、玉メガがいつまでも帰ってきません。不審に思った母は、浜に様子を見に行きましたが、玉メガの姿はどこにもありませんでした。

しばらくしてウブカニも八重山から戻り、夫婦で玉メガを探しまわりましたが、どこにも娘の姿は見当たらず、夫婦は嘆き悲みました。

3ヶ月ほどたったある日、乗瀬山へ出かけたウブカニ夫婦の前に、玉メガが湧き出るように立ち現れました。夫婦はとても喜び、娘のもとに走り寄って抱きしめようとしたが、玉メガは「私はこの島の護り神となりました」と言い残し、乗瀬山へ姿を消してしまいました。

ウブカニ夫婦はようやく逢えた娘との別れを惜しみ、乗瀬山に御嶽を建て、女神となった娘の玉メガを祀りました。

この時に作られた御嶽が、のちの乗瀬御嶽だと伝えられています。

参考：『伊良部村史』(1978)



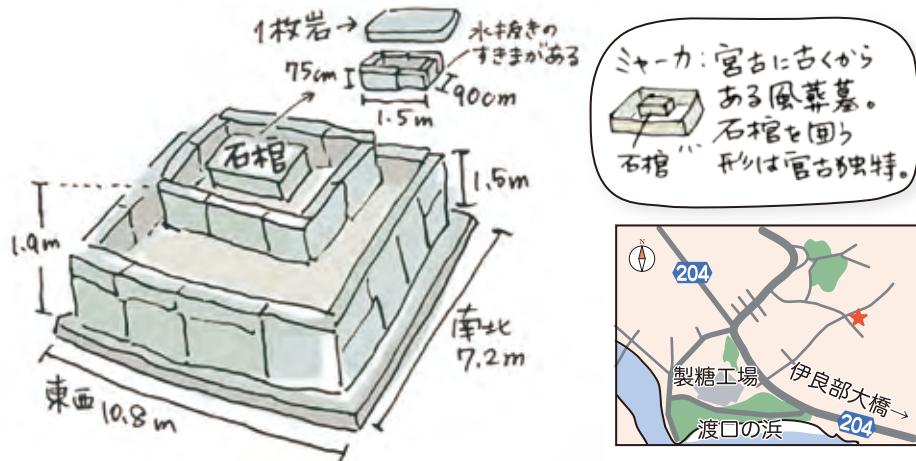
## ウブカニ御嶽

製糖工場の北隣にある、玉メガの両親を祀った御嶽。かつてこの御嶽の森は、娘の玉メガが祀られている乗瀬御嶽まで続く、乗瀬山と呼ばれる大きな森でした。

## スサビミヤーカ (巨石墓)



この巨石墓は1600年頃建造されたと考えられ、現存する伊良部地区のミヤーカの中では、規模が最も大きく、石の加工技術も優れています。誰を葬ったのかは、わかつていません。



## フナハガー



フナハガーは、集落の東側、伊良部ナカドウイ御嶽の隣にある洞泉です。この井戸に祀られている女神は、集落の西にある神里ガの神とともに、夫婦神として大切にされています。水量が豊富なため、1961年頃から製糖工場の水源として活用されています。



い ら ぶ う た き  
伊良部のナカドウイ御嶽

※御嶽は祭祀などを行う大切な場所です。神聖な場所なので入らないようにしましょう

この御嶽は、集落東側の森の中にあり、ピヤーズ御嶽の神「あからともかね」を迎えて「ユークイ」などの祭祀を行います。伊良部のユークイは、まず、公民館の拝所で口開けという儀式を行ってから、ナカドウイ御嶽で主たる祭祀を行います。午後からはアダンニヤ御嶽、乗瀬御嶽、フツモト御嶽を廻り、最後に集落内にあるカーアイという井戸へ赴いて、祭りを終えます。

な か ち う た き  
仲地のナカドウイ御嶽

※御嶽は祭祀などを行う大切な場所です。神聖な場所なので入らないようにしましょう

仲地集落の北方にある、通称「根原山」に、仲地のナカドウイ御嶽はあります。この御嶽も伊良部のナカドウイ御嶽と同様に、「ユークイ」などの祭祀は、ピヤーズ御嶽の神「あからともかね」を迎えて行っています。

仲地集落は伊良部集落から分村したため、親子の関係にあり、両集落で同時に進行する祭祀は、親である伊良部集落が優先して行います。



かん ざと  
神里ガー

1430年頃、この一帯はススキや茅の生い茂った窪地でした。牛が前脚で窪地を掘っていたので、洞泉が見つかったと伝えられており、集落の発展に大きな影響を与えました。

神里とは、「神様の集まる所」という意味だと考えられており、「生まれ元島の水」として神事に使われ、いまも信仰の対象となっています。



## ダキフガー



ダキフガーは五ヶ里道に面した六差路にあります。昔、この一帯はダキフ(ダンチク：イネ科の多年草)の群生があり、その中に湧き水があったことから、ダキフガーと名付けられたといわれています。集落の発展とともに改修され、直径が2mを超える掘り抜きの井戸になりました。現在は蓋がされ、中を見ることはできません。傍らにはヤスルギーと呼ばれる大きなガジュマルと御嶽があります。



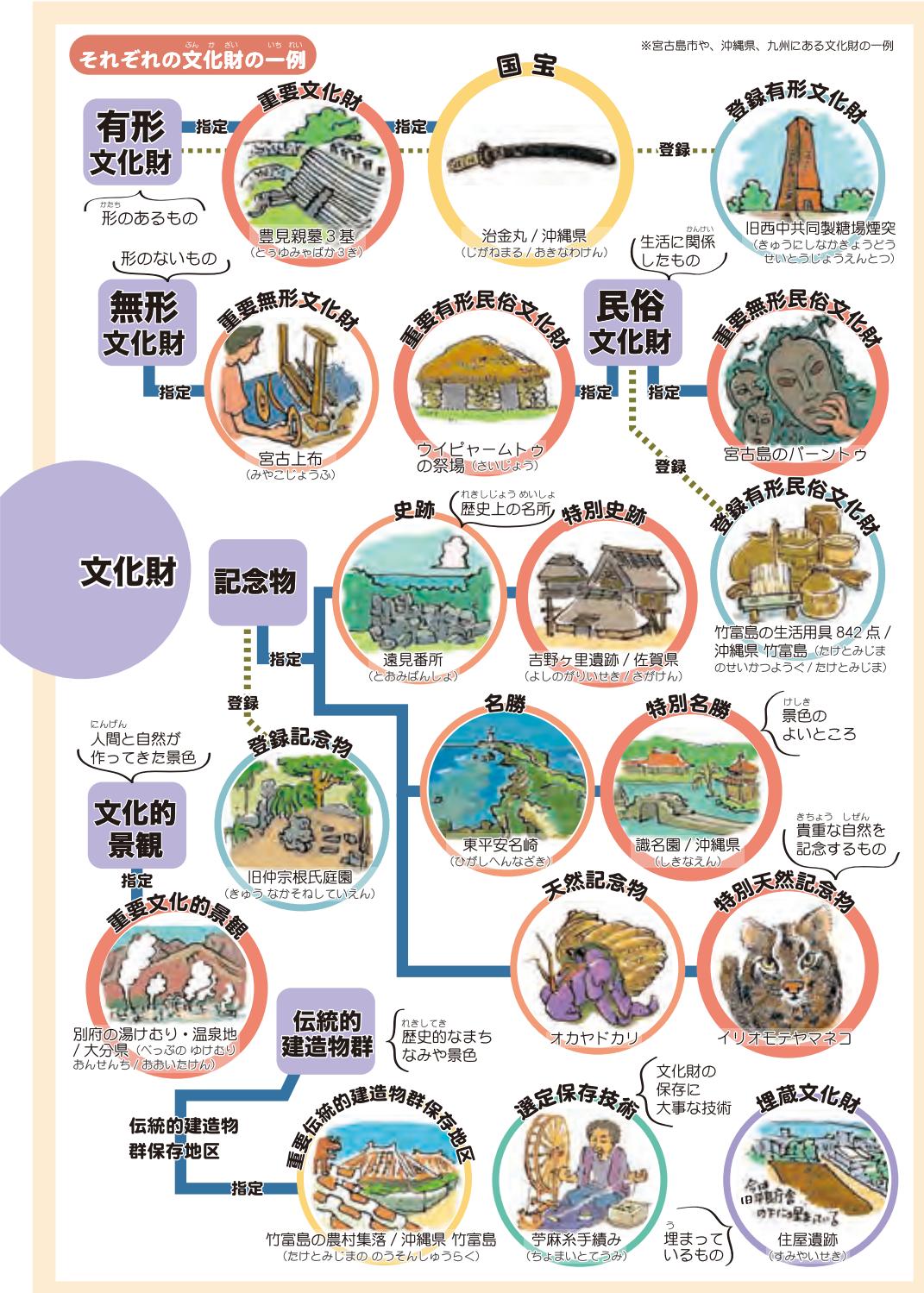
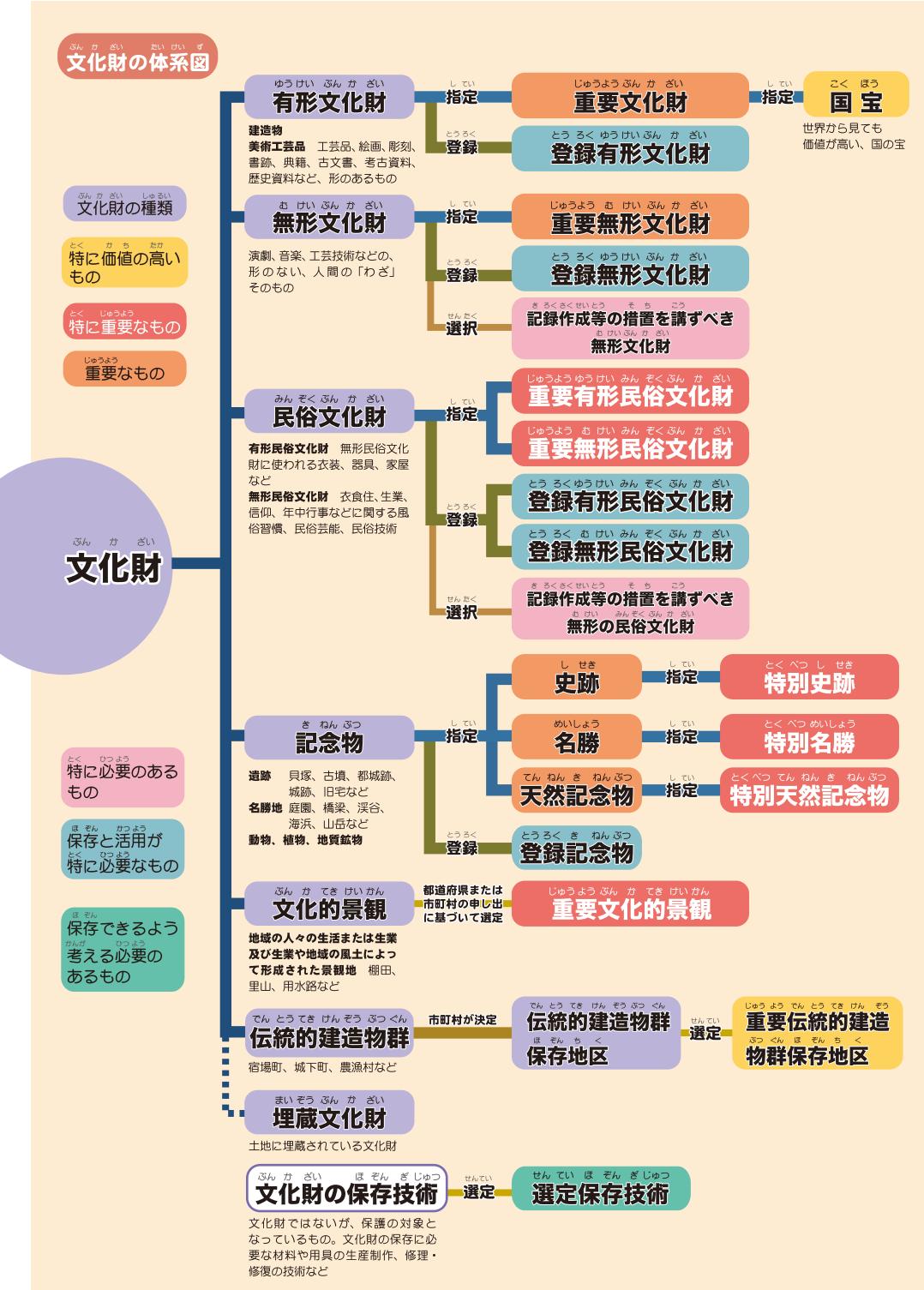
しも じ じま みなみ にし がん しょう かい がん  
下地島南・西岩礁海岸

ひがし かい めん ひろ ちたい  
東シナ海に面した下地島の南・西側海岸に広がる岩礁地帯  
がんそう こと せつかい がん あまみず しんしょく あらあら  
は、岩相の異なる石灰岩が雨水などによって浸蝕され、荒々  
ふくざつ いわいわ つづ み ふう けい  
しく複雑な岩々が続き、見ごたえのある風景が広がっています  
しゅうへん めいしょう なだか とお いけ だいひょう  
す。周辺には名勝として名高い「通り池」に代表されるド  
リーネも数多くあり、沖縄の岩礁地帯  
とくちょう あらわ かい  
の特徴をよく表しています。また、海  
ちゅう ちけい へんか と  
中の地形も変化に富み、ダイビングス  
ポットとしても人気です。

い ら ぶ じま れき し  
伊良部島の歴史

西暦	年号	関連ページ
1370年頃		久米島から「あからともかね」が来島したといわれる
1430年頃		フナハガー、神里ガー発見
1457	天順1	沖永良部島から「大世の主」が漂着したといわれる
1477	成化13	「朝鮮王朝実録」に伊良部が記録に初めて登場する
1600年頃		スサビミヤーが造られたといわれる / ダキフガー発見
1637	崇禎10	人頭税が課せられる
1686	康熙25	佐和田村が村建てされる
1720年頃		池間島から佐那浜(佐良浜)へ移住
1737	乾隆2	国仲村が村建てされる
1745	乾隆10	秋田能代船、下地島に漂着
1766	乾隆31	佐和田村から長浜村が、伊良部村から仲地村が分村
1771	乾隆36	乾隆三十六年大波(明和の大津波) 被害が甚大だった宮国、新里、砂川、友利に南区の5ヶ村から移住
1840年頃		佐良浜の大主御嶽建立
1850年頃		魚垣が善平マツによって考察される
1860年頃		塩田による製塩が始まる
1872	同治10	琉球藩となる
1873	同治11	初代伊良部村長、国仲寛徒が佐和田に生まれる(1929年没)
1873	同治11	独逸商船ロペルトソン号が宮国沖で遭難
1879	明治12	沖縄県となる
1903	明治36	人頭税廃止
1908	明治41	間切廃止、伊良部村設置
1909	明治42	佐良浜でカツオ漁とカツオ節の生産が始まる
1914	大正3	日露戦争の忠魂碑建立
1915年頃	大正4	糸満からアギヤー漁が伝わる
1915	大正5	五ヶ里道開通
1940	昭和15	連絡船「伊良部丸」遭難事故
1941	昭和16	第二次世界大戦(太平洋戦争)勃発
1944	昭和19	伊良部に独立混成第59旅団を配備
1945	昭和20	第二次世界大戦終戦
1952	昭和27	琉球政府創設
1961年頃	昭和36	フナハガーの水を製糖工場に利用
1963	昭和38	伊良部地区遺族会により慰靈之塔建立
1966	昭和41	佐良浜簡易水道完成
1972	昭和47	日本本土復帰
1979	昭和54	下地島空港開港
1981	昭和56	村役場が国仲から長浜に移転(現 伊良部支所)
1982	昭和57	伊良部町制施行 / 日本初の近代パヤオ漁導入
2005	平成17	5市町村合併、宮古島市誕生
2015	平成27	伊良部大橋開通

※琉球史の慣例により、1372~1878年は中国との朝貢関係を重視して中国年号で表示しています



わたし ぶんかざい  
**私たちの文化財です**

たいせつ  
**大切にしましょう**

ぶんかざい きょか むだん げんじょうへんこう  
文化財を許可なく無断で現状変更する

ほうりつ きんし  
ことは法律で禁止されています。



この冊子は非売品です (NOT FOR SALE)

宮古島市neo歴史文化ロード 綾道(伊良部島コース)

発行 初版 2017(平成29)年 3月  
改訂 2025(令和7)年10月

編集・発行 宮古島市教育委員会  
〒906-0103沖縄県宮古島市城辺字福里600番地  
TEL 0980-77-4947 FAX 0980-77-4957

イラスト・デザイン 山田 光